



「てある」・「ておく」構文について

山森, 良枝

(Citation)

神戸言語学論叢, 7:107-120

(Issue Date)

2010-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD01)

<https://doi.org/10.24546/81001861>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001861>



「てある」・「ておく」構文について

山森 良枝

神戸大学留学生センター

1. はじめに

動詞テ形に補助動詞の「ある」「おく」を続けた「～てある」は「～ておく」と共に、複合語になっていない複雑述語として捉えられる(影山 1993)¹。両者の違いについては、「ておく」がテ形動詞補文が表す事象の「行為」に焦点を置いて表現するとすれば、「てある」はその「結果」に焦点を置いて表現する形式である、と分析されている。しかしながら、「てある」構文と「ておく」構文の違いはこのように単純な二項対立で済まされるわけではない。特に「てある」構文は、行為の結果の現存以外に、目には見えない行為の蓄積や準備状況などを表す場合にも使用され、表層には現れない暗黙の動作主の存在やその意志を示唆するなど多様な意味を表し複雑な様相を呈する。しかし、現象の統一的な説明は未だ提案されていない。本稿では、これらの構文は単なる項の叙述ではなくテ形動詞補文の表す事象とその結果状態や企図という次元の異なる2つの事象間の関係を表す構文である、という立場から分析し、統一的視座に基づいて現象を説明することを試みる。

2. 現象と先行研究

「てある」構文、「ておく」構文の用法や両者の違いについては、種々の先行研究がある。しかし、概ね、(1a,b)のような意志性動作動詞と結合し、「(先を見越した意志的な) 行為→結果」の流れの中で「ておく」が<行為>に焦点を置いて表現するのに対して、その<結果の状況>に焦点を置いて表現するものが「てある」である、とする点で意見の一致を見ることが出来る(森田 1977, 益岡 1987, 1992, 杉村 2003, 金水 2009 等)。

- (1) a. ビールを買っておこう
b. ビールなら、もう買っている

しかしながら、「てある」構文、「ておく」構文は動作主の表示可能性などさまざまな点において異なっており、その違いが両者の意味の違いのみならず、「てある」構文の示す多様な意味の派生にも影響を及ぼしているように思われる。本章では、先行研究において議論の対象とされてきたテ形動詞のタイプ、テ形動詞補文の表す事象(以下、「コア事象」²と呼ぶ)の時点と主節時の関係、動作主、その意図性、といった項目について検証し、初期的観察を行うことによって、「てある」構文、「ておく」構文の解決しなければならない問題点と、多様な意味や用法を統一的に説明するための方向性を明確にする。

2.1. テ形動詞の特性

先行研究で指摘されてきたように、「てある」構文、「ておく」構文が<先を見越してする行為やその結果>を表す読みを持つためには、原則的に、コア事象を表すテ形動詞は意志的動作動詞でなければならない。たとえば、(2)(3)では、a,bの意志的動作を表す他動詞「置く/暖める」とは共起するが、c,d,eの非意志的事態を表す他動詞「忘れる/間違える/うっかりする」とは共起できない。

- (2) a. 机の上に本が置いてある
 b. 窓が開けてある
 c. *約束が忘れてある
 d. *道が間違えてある
 e. *うっかりしてある
- (3) a. 机の上に本を置いておく
 b. 窓を開けておく
 c. *約束を忘れておいた
 d. *道を間違えておく
 e. *うっかりしておく

ただし、「てある」「ておく」と結合することができる動詞にはばらつきがある。たとえば、(4a) (5a) のように、「てある」は非意志的な動作動詞とも共起することができる。しかし、(4b,c) (5b,c)のように、「ておく」は (意志性を示唆する)「わざと」がなければ非意志的な動作動詞と共起できない。

- (4) a. 机の上にサイフが忘れてある
 b. *机の上にサイフを忘れておいた (杉村 2003)
 c. わざと机の上にサイフを忘れておいた
- (5) a. 「涼」という字が間違えてある
 b. *「涼」という字を間違えておいた
 c. わざと、「涼」という字を間違えておいた

逆に、次の例では「ておく」はどの動詞とも共起する。しかし、「てある」はそのどれとも共起できない、というコントラストを示す。

- (6) a. *彼の言葉を信じてある
 b. 彼の言葉を信じておこう
 (c. 彼の言葉を信じている)
- (7) a. *法律を知ってあることは損じゃない
 b. 法律を知っておくことは損じゃない (杉村 2003)
 (c. 法律を知っていることは損じゃない)
- (8) a. *ここは {勝って/負けて} ある
 b. ここは {勝って/負けて} おく (杉村 2003)
- (9) a. *ゆっくりしてある
 b. ゆっくりしておく
 (c. ゆっくりしている)

杉村 (2003) は、(6)-(9) について、(7)「信じる/知る」はコントロールできない行為であり意志的動作動詞の範疇からはずれる、(4)「勝つ/負ける」は行為の結果が現存する具体的な対象や有効性が目に見えないものである、の2点を指摘し、「てある」と「ておく」の間のコントラストは、(7) (4)が「てある」構文の広義の存在文であるという意味特性となじまないことによる、と説明している。

しかしながら、まず、(7) に反して、(9) の「ゆっくりする」は意志的動作動詞であるにも拘らず、「てある」と共起できない。また、(4) のように、「信じる/知る」がコントロールできない行為を表す非意志的動作動詞であると仮定すると、非意志的動作動詞であるにも拘らず、これらの動詞が「ておく」と結合できるという事実が問題になる。さらに、次の (10a-c) は、<行為の結果>として具体的な対象や有効性の存在が知覚できないという点で (6)-(9) と

一致するにも拘らず、((6)-(9) のaとは逆に)、これらは容認される例である。「てある」構文、「ておく」構文の分析は、一方と結合するときには容認されない動詞が、他方と結合されるときには容認されるというテ形動詞との共起可能性に関する両構文の非対称性を予測できるものでなければならない。

- (10) a. その点は十分考えてある
 b. 秘密が話してある
 c. 必要な手は打ってある (森田 1977)

(6)-(9) aの「てある」構文はcの「ている」構文に言い換えたほうが容認性が高くなる、という事実を考えたとき、(6)-(9) aの「てある」構文の不自然さの要因は何かという問いに対する答えとして、純粋にテ形動詞の意味だけに依存するアプローチは困難なように思われる。それよりも、「てある」/「ておく」構文の認可には、文全体の事象構造が関係している、と仮定する方が妥当であろう。つまり、「ている」構文も「てある」構文も何らかの存在や状態を表し、「ておく」構文と対立する。しかしながら、(6) (7) (9) に見られるaとcのコントラストには、状態と非状態の対立ではなく、むしろ、「ている」構文が単一事象を表すのに対して、「てある」/「ておく」構文は、テ形動詞補文と主節が表す2つの事象の関係を表す、という事象構造に関わる対立が関係しているように思われる (cf. 図1³)。

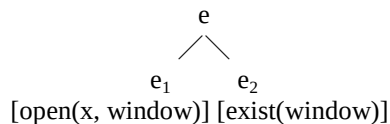


図1：窓が開けてある

2.2. 事象の時点

この直感を確認するために、この節では、「てある」/「ておく」構文および「ている」構文におけるテ形動詞補文と主節の時間関係について検討する。

「ている」構文も「てある」構文も何らかの状態や存在を表す点で共通している。もし両者が共に単一事象を表すとすれば、どちらの構文も、主文末述語がル形を取るとき、発話時を表示する「今日」とは共起し、(「今日」以外の時間を表示する)「明日/昨日」とは共起しないことが予測される。そこで、(9a-c) に特定の時間を表す時間副詞を付加してみると、次のようになる。

- (11) a. *今日はゆっくりしてある (ので今日は元気だ)
 b. 今日はゆっくりしておこう (と今のところ考えている)
 c. 今日はゆっくりしている (ので(今日は)元気だ)
- (12) a. {前の休みに/昨日} ゆっくりしてある (ので今日は元気だ)
 b. *{前の休みに/昨日} ゆっくりしておこう (と今のところ考えている)
 c. *{前の休みに/昨日} ゆっくりしている (ので今日は元気だ/と今のところ考えている)
- (13) a. *{今度の休みに/明日} ゆっくりしてある (ので今日は元気だ)
 b. {今度の休みに/明日} ゆっくりしておこう (と今のところ考えている)
 c. *{今度の休みに/明日} ゆっくりしている (ので今日は元気だ/と今のところ考えている)

予測に反して、「今日」と共起することができるのは「ている」と「ておく」だけで、「てある」は共起できない。「てある」が共起することができるのは過去を表す「前の休みに/昨日」である。しかし、「ている」「ておく」はこれらの時間副詞とは共起できない。さらに、未来を表

す時間副詞句「今度の休みに/明日」と共起できるのは、「ておく」だけであり、「てある」も「ている」もこれらとは共起できない、という結果を得た。これらの時間副詞句が指すのはコア事象の生起時間であることから、①（「今度の休みに/明日」と共起できない）「てある」/「ておく」構文のコア事象が表す出来事時は、「ある」/「おく」を含む主節時とは異なる時間の次元に属し、②「てある」構文ではテ形動詞補文の表すコア事象が発話時に先行して起こるが、③「ておく」構文では発話時がコア事象に先行するという時間関係が成立していることが分かる。つまり、「てある」/「ておく」構文は、コア事象とその<結果状態>や<企図>という次元の異なる2つの事象間の関係を表す構文であり、2つの事象間の時間的前後関係が、「てある」/「ておく」構文の認可条件（の1つ）となっている、と一般化することができる。

たとえば、菊地（2009）は「ておく」構文の用法について次のように述べている。

o「ておく」の用法

- a. t1、t2という二つの「時」を問題にしている。
- b. t1=「行為の時」、t2=「行為の効力が発現する時」である。
- c. 行為者は、t1の「行為の時」において、「その行為の結果として、後の時t2において何らかの効力が発現するであろうこと」を見越している。
- d. 行為者は、この点を見越した上で、t1の行為を意図的に行う。
- e. 行為者は、(d) の行為の意図性の有無を話し手が認定できる人物でなければならない。典型的には、話し手自身である。
- f. 話し手は、以上のことを、(t2ではなく) t1の時に立って述べる。
- g. 以上の場合に、t1に行われる行為をあらわす動詞に「ておく」を付す。

（菊地 2009:7）

この菊地の記述も、「ておく」構文の認可においてテ形動詞補文と主節が表す事象の時間的前後関係が重要な条件であることを示すものである。

ただし、次の「てある」構文は、過去のコア事象の時点を指定する「昨日」とは共起できず、こうした認可条件への反例となる。

- (14) a. *昨日机の上に本が置いてある
b. *昨日窓が開けてある

この問題については後で検討するとして、ここで「てある」構文について認識しておかなければならないことは、§2.1でも触れたように、(上の一般化への反例となる) (14a,b) が (4a) (5a) と同じ存在文の類だ、ということと同時に、(対象の現存を示さない点において) (4a) (5a) とは異なる (9a) や (10a-c) のようなタイプの「てある」構文もある、という事実である。両者の境界ははっきりと区別できるものではないが、それでも認識できる傾向の違いは確かにある。第一に、目的語(対象)の格標示に関して言えば、(4a) (5a) は主格を取るが、目的語(対象)が対格を取る、あるいは、動作主が主題として提示される「てある」構文もある。第二に、動作主に関して、(4a) (5a) では目的語が主格を取るため、動作主の生起する位置がないのに対して、目的語が対格を取る「資料を集めてある」のような「てある」構文は、主語として生起し得る動作主を強く示唆するように思われる。これまでの研究は、「てある」構文を結果の現存を表す広義の存在文と結果が現存していないものに区別してきたが、後者のタイプに分類される「てある」構文は多様な意味用法を持ち、個々の事例についてさまざまな指摘がなされてきた。以下ではそのうち主な主張を概観し妥当性を検証する。

2.3. 構文の種類と動作主

動作主の主格主語位置への生起可能性は「てある」構文の種類にも少なからず関係している。代表的な「てある」構文の例として益岡 (1987) の分類とその実例を示したものが、次の(15)である。

(15) A1型：広義の存在文

- a. テーブルに花が飾ってある

A2型：対象に認められる何らかの状態の存続

- b. 入口に近い片すみが一畳余りの広さだけあけてある

B1型：行為の結果もたらされる事態が基準時において引き続き存在している

- c. 業行は自分が写した経巻類をまだ相当量各地の寺々に預けてあり・・・

- d. ベストメンバーを選んであるんだぜ

B2型：行為の結果が基準時において何らかの有効性を示す

- e. 天王山に向けてそれぞれの調整を指示してあります

- f. 夜ばかり続く冬の間に寝だめしてあるのかと思うほどだ

「てある」構文の統語構造を考えると、A1型、A2型では、目的語が主格の形で主語の位置に生起し、動作主は生起し得ない。しかしながら、A1型、A2型には、暗黙の動作主が前提されている、と言われてきた。たとえば、(15a) では「花が勝手にテーブルに飾ってある」のではなく、「誰かが何かのためにそうした」ことが示唆される。これに対して、目的語が対格を取るB1型、B2型には、動作主が主題として現れる (15c) や、意味上の主語として動作主あるいは経験者が示唆される (15e,f) のようなデータがある。

一方、「ておく」構文では、目的語が対格の形で目的語の位置に留まる。そのため、意味上の主語のみならず、(16c) のように主格主語も取ることができる。この主語の指示対象はコア事象の動作主である。動作主については、益岡 (1992) が「基本的に1人称に限られる」とするのに対して、菊地 (2009) は、2人称者や3人称者を動作主とする (16a-c) のような例をあげ、よりゆるやかな制約として(17)を提案している。

(16) a. 試験の前によく勉強しておいてください

- b. 氾増も安心して、今朝、この項荘にだけは秘策をさずけておいた (菊地 2009; 4)

- c. あの話は、父さんが引き延ばしておいたよ (菊地 2009; 10)

(17) 「ておく」の行為者は、その行為が「後まで見越した上で行う意図的な行為」であるか否かー簡単にいえば、その行為の意図性の有無ーを話し手が認定できる人物でなければならない。典型的には話し手自身である。 (菊地 2009; 5)

また、「ておく」構文と「てある」構文の関係については、益岡 (1992) が、「ておく」構文に対して、<行為ー結果>の関係に対応づけられるのは(15)のB2型の「てある」構文である、と述べている。たとえば、(15e,f) の「てある」を「ておく」に変えた (18e,f) では、焦点が<結果>から<行為>に移行した読みが生じる。

(18) e. 天王山に向けてそれぞれの調整を指示しておきました

- f. 夜ばかり続く冬の間に寝だめしておいたのかと思うほどだ

これに対して、杉村 (2003) は益岡の分類について反論し、(8a) や (19a) の不自然さの理由として、「勝つ/負ける/死ぬ」は結果や有効性の存在を表し得ず、この事実が<結果>に焦点を置く「てある」構文の意味となじまないことをあげ、これを根拠に、A型の「てある」構文が「対象の存在」を表す存在文であるのと同様に、B型の「てある」構文も「有効性の存在」を示す存在文であると主張している。

- (8) a. *ここは {勝って/負けて} ある
 b. ここは {勝って/負けて} おく
 (19) a. *僕はあの時死んであるべきだった
 b. 僕はあの時死んでおくべきだった

このように、先行研究では、「てある」構文の類型について、益岡 (1987) や金水 (2009) のように、広義の存在文のA型「てある」構文と行為の結果を述べるB型「てある」構文の二つに区分する立場と、杉村のように、どちらも存在文と考える立場がある。しかしながら、どちらの議論においても<行為の結果>や<行為の有効性>に関する客観的な尺度が言及されているわけではない。そこで、1つの可能性として、動作動詞に適用される様態副詞ではなく、「熱心にいやいやながら/しぶしぶ」などの動作主の態度を表す<動作主副詞句>との共起可能性に従って、「てある」構文の類型を規定する、という方法が考えられる。即ち、動作主副詞は主語をそのスコープ内に含むため、動作主を表せない存在文タイプの「てある」構文はこれを排除するのに対して、動作主を表示できる、あるいは、意味上の動作主を取ることができる非存在文タイプの「てある」構文はこれを許容する、という客観的基準によって、「てある」構文の仕分けが可能になる、と仮定してみよう。この仮定に従って、(15) のA1、A2、B1、B2型の類型毎の事例aとそれに準じる事例bに動作主副詞を付加してみると次のようになる。

- (20) a. テーブルに花が飾ってある
 b. *熱心にテーブルに花が飾ってある
 (21) a. *しぶしぶ入口に近い片すみが一畳余りの広さだけあけてある
 b. *しぶしぶ窓が半分開けてある
 (22) a. ?しぶしぶ業行は自分が写した経巻類をまだ相当量各地の寺々に預けてある
 b. ?いやいやメンバーを選んである
 (23) a. ??熱心に私から(選手に)調整を指示してあります
 b. ? 熱心に歌を練習してある

A1型の (20a,b)、A2型の (21a,b) は動作主副詞を排除する。一方、B1型の (22a,b)、B2型の (23a,b) は、多少の程度差はあるものの、これらを許容する。また、(21a,b) のガ格をB型と同じヲ格に換えると、次のように容認性が相対的に高くなる。

- (24) a. ?しぶしぶ入口に近い片すみを一畳余りの広さだけあけてある
 b. ?しぶしぶ窓を半分開けてある

以上から、動作主副詞との共起可能性を目安にすれば、益岡 (1987) が指摘するように、「てある」構文は目的語が主格表示されるA型と対格表示されるB型の2つの類型に大別されるというパターンを示していると考えてよいだろう。

このことをさらに確証するために、道具を表す付加詞との共起可能性も見ておこう。「*木がノコギリで倒れた」と言えないように、道具を表す付加詞も動作主を表すことができる文に生起する。そこで、道具付加詞を「てある」構文に付加してみると次のようになる。

- (25) *テーブルに花がはさみで飾ってある
 (26) *窓ガラスがバットで割ってある
 (27) ?窓ガラスをバットで割ってある
 (28) わざとメンバーをくじで選んである
 (29) インターネットで情報を集めてあります

上のデータでは、道具付加詞は、動作主副詞が容認された例と同じタイプの例で容認されるが、動作主副詞が認可されなかった例と同一タイプの例では排除されることが見てとれる。また、前者の例は非明示的な動作主を含むため、道具を表す付加詞は非明示的な動作主とも共起する、と考えてよいだろう。とすれば、道具付加詞は、意味上の主語を取る「ておく」構文でも生起することが予測される。実際にデータに当たってみると、この予測が正しいことが確認できる。すなわち：

- (30) 熱心に鉛筆をナイフで削っておく
- (31) しぶしぶメンバーをくじで選んでおく
- (32) 熱心にインターネットで資料を集めておきます

ここまでの観察結果から、「てある」構文も「ておく」構文も、動作主に敏感で、動作主を基準に、(i)目的語が主格を取り、動作主を表せないA型一存在文の「てある」構文、(ii)目的語が対格を取り、(非明示的) 動作主を表すことができるB型の「てある」構文、(iii)目的語が対格を取り、意味上の主語のみならず主格主語としても動作主を取ることができる「ておく」構文、という三種類のグループに分類されることが分かる。

2.4. 意志性と動作主

では次に、「てある」構文と「ておく」構文における動作主の意志性に関する金水 (2009) の提案を見ておこう。

金水 (2009) は (33) のように図式化される「意志性の階層性」をたてた。金水によれば、「意志性1」は主語の指示対象が「そうしたい」と思って「そうする」という最小限の意味での意志性を指し、命題内の意志性を表すのに対して、「意志性2」は「次に何かをするために」事態の連鎖の中で行われる意志的行為に関わるものであり、命題を越えた意志性のあり方を表している。

(33) [発話現場的 [命題外的 [命題内的：意志性1] 意志性2] 意志性3]

(34) シテアルの意味（一時的）：

- a. 無標の意志動詞文は、意志性1を主として表し、意志性2は語用論的に含意される。
- b. A型シテアルは、意志性2までを表す。文脈・知識との調和・適合が必要。
- c. B型シテアルは、主観的意志までを表す。

(金水 2009:279)

また、「ておく」構文における意志性について、金水は次のように述べている。

(35) シテオク（シテオイタ）の意味特徴：

主語の指示対象は動作主であるとともに意志性2の主体でもある。

ただし、意志性の主体である動作主の実態は単純ではない。たとえば、A型「てある」構文の (36a,c) に動作主を付加して (36b,d) のように言うことはできない。

- (36) a. テーブルに花が飾ってある
- b. *テーブルに花が学生によって飾ってある
- c. 窓が半分開けてある
- d. *窓が半分学生によって開けてある

これに対して、B型の「てある」構文や「ておく」構文では、次のデータが示しているように、動作主が主に主題やデ格/カラ格主語として生起できる。しかしながら、(動作主が主格主語

として生起できる「ておく」構文は別として)、B型「てある」構文に動作主が主格主語として生起できるかどうかは微妙である。

- (37) {学生達で/*学生達が}ベストメンバーを選んである
(38) {コーチから/?コーチが}天王山に向けて調整を指示してある
(39) (= (12c)) その話は、父さんが引き延ばしておいた

(39) では動作主が主格主語としてスムーズに生起できるが、(37) と (38) では主格主語と斜格主語の間に容認性の違いが生じる。この違いは何に起因するものなのだろうか。

そこで注目したいのは、「てある」「ておく」構文の主語はコア事象を表す動作動詞の動作主Xである、と同時に、「てある」構文ではコア事象を属性として所有する主体Yであり、「ておく」構文ではコア事象を企図する主体(企図者: initiator)Yでもある、という点である。たとえば、(38) の主格主語として現れる「コーチ」は、実際にコア事象の表す「調整を指示する」役割を持った主体であると同時に、コア事象を企図する主体でもある。これに対して、(37) の「学生達/学生」はコア事象を実現する動作主であり得ても、それを企図する主体として必ずしも適格であるわけではない。この違いが、前者の動作主の方が、後者の動作主よりも主格主語として容認され難い要因の1つであると考えられる。とはいえ、「てある」構文では、そもそも動作主が生起できないA型だけでなく、B型でも動作主が主格主語として現れることは稀であり、多くの例で斜格主語や企図者を表す主題として実現される。つまり、上で触れたコア事象の企図者としてのYは、主節動詞「ある」「おく」と呼応する位置に生起するのだが、殆どのケースにおいて、XとYは同一人物を指すと言えるようである。

2.5. 企画者

先程触れたように、金水 (2009) は意志性に関して、命題内の意志性を「意志性1」、命題を越えた意志性を「意志性2」と規定している。意味と形式を混同してしまうという落とし穴を避ければ、命題内の「意志性1」が先程の動作主Xの意志性と一致し、命題を越えた「意志性2」が行為を企図する企図者Yの意志性と一致する、と見なすことは可能であろう。

実際、A型の「てある」構文は、(36b) のように動作主を表示し得ないだけでなく、(40) (41) のように、企図者を主題として表示することもできない。

- (40) *学生は、テーブルに花が飾ってある
(41) *学生は、窓が半分開けてある

これに対して、(42)~(44)のように、B型の「てある」構文も「ておく」構文も企図者を主題として表示することができる。

- (42) 学生達は、(すでに)ベストメンバーを選んである
(43) コーチは、天王山に向けて調整を指示してある
(44) お父さんは、その話を引き延ばしておいた

2.6. まとめ

ここまでの議論をまとめると次のようになる⁴。

(45)	目的語	動作主X	企画者Y	コア事象時 t_c /主節時 t_m	意志性
(i) A型「てある」	主格	×	×	$t_c > t_m$	X/Y (文脈に依存)
(ii) B型「てある」	対格	斜格 非明示的	主題	$t_c > t_m$	X/Y or X=Y
(iii) 「ておく」	対格	主格/斜格 意味上	主題	$t_c < t_m$	X/Y or X=Y

繰り返し述べているように、「ておく」構文とB型「てある」構文は<行為>と<結果>の表示において相補的な分布を示す、と言われてきた。ところが、(45) を見てみると、この両者が純粋に相補的な分布を示すのは、コア事象と主節の時間的前後関係だけで、目的語や動作主/企画者の表示、および、意志性に関しては、A型の「てある」構文とB型の「てある」構文の方が、B型の「てある」と「ておく」構文よりも多くの点で異なっていることに驚かされる。しかし、両構文は、これほどの類似点がありながら、<行為>と<結果>に焦点を置く構文だ、という点では一致していない。両者の間には、コア事象と主節の時間的前後関係以外にも相違点があるのだろうか。次章では、主節動詞の「ある」/「おく」に注目して、「てある」構文と「ておく」構文のアスペクトの違いについて見ることにしよう。

3. 事象の限定性：影山 (1993)

影山 (1993) で指摘されているように、<テ形+動詞>の複雑述語は動詞によって直接受身になる場合とならない場合がある。「てある」は直接受身にならないが、「ておく」はなることができる。次の例は「てある」構文が直接受身になれないことを示しているが、そもそも「ある」は「いる」と共に直接受身を許さない動詞である。

- (46) a. 机の上に本が置いてある → *置いてあられる
b. 家族にはその件を伝えてある → *伝えてあられる

一方、「ておく」は、次のように、基本的に直接受身を許容する。

- (47) a. 陳列台に商品を並べておいた → 商品が陳列台に並べておかれた
b. 新しい薬を試してみた → 新しい薬が試してみられた

ただし、「ておく」の受身はどのような動詞と共起しても自由に適用されるわけではない。影山 (1993) は、目的語が「おく」の原義である「置く」との意味的整合性を持たなければ（「おく」が目的語を0標示しなければ）、複雑述語全体の受身化は許されない、と述べている。次のデータも影山 (1993) からのものである。

- (48) a. 駐車場に車を入れておいた → 車が駐車場に入れておかれた
b. 貴重品をロッカーの中にしまっておいた → 貴重品がロッカーの中にしまっておかれた
(49) a. スイッチを押しておいた → *スイッチが押しておかれた
b. 風呂を沸かしておいた → *風呂が沸かしておかれた

(テ形では形態的編入がないため)、主節動詞の特性の重要性が鮮明になる。ここで認識しておかなければならないことは、直接受身が適用されるのは限定的な事象に限られる、という点である。従って、状態動詞「ある」を主節動詞とする「てある」構文が表す事象は、非限定的な事象であり、直接受身は適用されない。これに対して、「おく」を主節動詞とする「ておく」構文が表す事象は限定的な事象であり、直接受身が適用される、ということになる。実際にはどうか確認してみよう。

限定的な事象は、命令文、擬似分裂文、「説得する」の補文に問題なく生起するのに対して、非限定的な事象は共起できないと言われるが、「てある」構文と「ておく」構文はこれらの環境への生起可能性に関して次のように明確なコントラストを示す。

(50) 命令文

- a. *テーブルに花が飾ってあれ
- b. *ベストメンバーを選んであれ
- c. 風呂を沸かしておけ
- d. 寝だめしておけ

(51) 擬似分裂文

- a. *彼がしたことはテーブルに花が飾ってあることだ
- b. *私がしたことはベストメンバーを選んであることだ
- c. 私がしたことは風呂を沸かしておいたことだ
- d. 私がしたことは寝だめしておいたことだ

(52) 「説得する」補文

- a. *彼は私にテーブルに花が飾ってあるように説得した
- b. *彼は私にベストメンバーを選んであるよう説得した
- c. 彼は私に風呂を沸かしておくよう説得した
- d. 彼は私に寝だめしておくよう説得した

しかしながら、「てある」も「ておく」も限定的な事象を表す意志的動作動詞のテ形と主に結合する、という共通点を持つ。このことから、「ある」はコア事象の表す限定的な事象を非限定的な事象にシフトする機能を持ち、A型、B型を問わず、「てある」構文全体は (受身化が適用できないことから明らかに) 非限定的な事象を表す。これに対して、「おく」は限定的なアスペクトを表す動詞であり、限定的な事象を表すテ形動詞補文と結合して (受身化が適用できることから明らかに) 限定的な事象を表す、と考えられる。このようなアスペクトを持つテ形動詞補文と主節動詞の組み合わせは、文の意味とどのように関係しているのだろうか。次章では、イベントを量化対象とするイベント数量詞 (event quantifier) という概念を導入し、テ形動詞補文と主節動詞の相互作用の実態を示して、A型「てある」、B型「てある」および「ておく」構文の意味的差異を明らかにする。

4. 意味論的分析

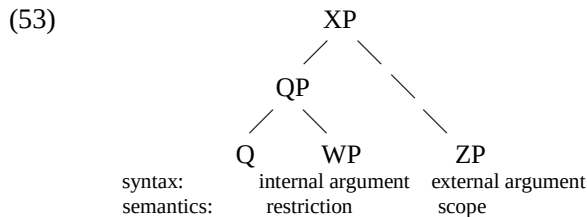
前章で見た通り、B型「てある」構文と「ておく」構文は、テ形動詞補文が表すコア事象の叙述を行うと考えられる。コア事象の叙述に際しては、コア事象の動作主や時制、(非) 限定性が意味の産出に重要な役割を果たし、両構文の認可や意味解釈に対する重要な制約となっていることが分かった。しかしながら、動作主が重要な役割を果たすという制約によって、動作主を表示し得ない存在文型のA型「てある」構文をうまく説明できるかどうかは明らかではない。この章では、<イベント数量詞>⁵という概念を導入して、「てある」「ておく」構文の基本的な分析の枠組みを精緻にし、(45) の3類型に区別された「てある」「ておく」構文を統一的視座から記述・分析できることを示す。そのために、まず、イベント意味論について簡単に触れておこう。

4.1. イベント意味論

イベント意味論 (event semantics) は、Davidson (1967) に由来し、文は事象の記述であるとする立場から、イベント項を論理表示の対象とする。特に、動詞はイベントの叙述を表す一項述語として翻訳される。そのため、項は、動詞が表すイベントをイベントの参与者

に関係づける関係を通して間接的にしか動詞と結びつけられない。その結果、任意の項の設定が可能になる、という特徴を持つ。

本稿では、Davidsonの<イベント数量詞>という概念をイベント、状態、時間などの要素と共に導入する。量化のスコープについては、一般的に、数量詞の内項は制限要素 (restrictor)、そして、外項はスコープ (scope) として解釈され、そのLFは次のように表示される (QP, XP, WP, ZPという略語に特段の意味はない。ポイントはこれらが階層構造を成す点にある)。



(Herburger,2000)

同様に、Davidsonの<イベント数量詞>でも、その<制限要素>は動詞句であり、<スコープ>は動作主である (Larson and Segal 1995)。たとえば、次の例では、イベント数量詞が暗黙のイベント数量詞として、sometimeのように表記されるが、フォーカスをLFに写像する前のLFは (54b)、写像後のLFは (54c) のように表示される⁶。

- (54) a. Paul sometime ordered SALMON.
 b. [sometime [Paul ordered SALMON]]
 c. [[sometime [Paul ordered]]] [Paul ordered SALMON]]

イベント意味論では、(54c) のように、量化表現の叙述内容がコピーにより構造内に2度現れる。そのうち、コピーの片方がイベント数量詞の<制限要素>になり、フォーカス要素を差し引いたもう一方のコピーは<スコープ>の部分になる。(54b) をより透明な形式に翻訳すると (55) のようになる⁷。

- (55) [∃e: Agent(e, paul) & Order(e) & Past(e)] [a x: Salmon(x)]
 Theme(e, x) & Agent(e, paul) & Order (e) & Past (e)

Parsons (1990) は、これに加えて、“Cul” と “Hold” の2つの述語を設定し、<イベント>と<状態>を区別する。“Cul” はイベントの進展や達成を表し、“Hold” は状態の保持を表す (Larson and Segal 1995)。以下では、これらの装置を使って、「てある」/「ておく」構文の意味分析を試みよう。

4.2. A型「てある」構文

上で述べたように、イベント数量詞の<制限要素>は動詞句であり、<スコープ>は動作主である。しかしながら、A型「てある」構文は、目的語が主格主語として表示されるため、動作主を表示できなかった。従って、<スコープ>は動作主以外の要素でなければならない。前節で触れたように、一般的に、統語構造上低い位置に生起する要素は数量詞の制限要素 (restrictor)、高い位置に生起する要素はスコープ (scope) として解釈される (Diesing 1992)。これに従えば、A型「てある」構文の<スコープ>は「主語」、<制限要素>は「テ型動詞補文+ある」になる。また、A型「てある」構文は非限定的アスペクトを持ち、テ型動詞補文が表すコア事象とその結果の現存が属する時間は異なっている。以上を踏まえて、暫定的に (56)の論理構造を記述すると(57)のようになる。

(56) 机の上に本が置いてある

(57) $\exists e, e' \exists y$ [[[Put (e) & Location(table, e) & Cul (e)] & [Exist (e') & Hold (e')]]] [[y: Flower (y)] Theme(y, e) & Put (e) & Location(table, e) & Cul (e)] & [Exist (e') & Theme(y, e') & Location(table, e) & Hold (e')]] & e < e']

ここでは $e' < e$ によってコア事象 e が主節事象 e' に先行することが表されており、(57) は「机の上に置かれた花」が発話時 (=主節時) において現存しているという解釈を表している。

4.3. B型「てある」構文

A型とB型の「てある」構文は、動作主の表示可能性が排除されているか否かという点で区別される。ここでは、第2章でもあげた次の例を考えよう。

- (58) a. 私は、資料を集めてある
b. 僕は、寝だめしてある

第2章で詳しく検討したように、A型だけでなく、B型でも動作主が主格主語として現れることは稀であり、主に斜格主語や経験者が主題 (=企図者) として生起する。また、目的語に関しては、(58a) のように、目的語を対格表示する例だけでなく、(58b) のように、テ形動詞が自動詞で目的語を取らない場合も多くある。これらをA型「てある」構文の (56) と比べると、主題の認可についてコントラストを示す、ということになる。一般的に、統語構造上低い位置に生起する要素は数量詞の制限要素、高い位置に生起する要素はスコープとして解釈される (Diesing 1992)。従って、B型「てある」構文の<スコープ>は「主題」、<制限要素>は「テ型動詞補文+ある」、ということになる。その一方で、B型「てある」構文とA型「てある」構文には、非限定的アスペクトとコア事象の主節時への先行性を示すという共通点がある。以上を踏まえて、暫定的に (58a) と (58b) の論理構造を記述すると次のようになる。

(59) $\exists e, e' \exists x$ [[[Gather (e) & Theme(material, e) & Cul (e)] & [Exist (e') & Theme(material, e') & Hold (e')]]] [[[x: I(x)] Agent(x, e) & Gather (e) & Theme(e, material) & Cul (e)] & [Exist (e') & Theme(material, e') & Location(x, e') & Hold (e')]]] & e < e']

(60) $\exists e, e' \exists x$ [[[Sleep (e) & Cul (e)] & [Exist (e') & Hold (e')]]] [[[x: I(x)] Agent (x, e) & Sleep (e) & Cul (e)] & [Exist (e') & Experiencer(x, e') & Hold (e')]]] & e < e']

(58a)は (59)、(58b) は (60) にそれぞれ対応している。(59) では、動作主(I)がコア事象の結果として蓄積された資料の持ち主(Location)でもあることを表す。また、(60)では、動作主(I)がコア事象の結果を自らの体内に蓄えているという意味で経験者 (Experiencer) でもあることを表している。

4.4. 「ておく」構文

「ておく」構文は、(61) のように、動作主が主格、目的語が対格を取る他動詞型の構造を持ち、限定的アスペクトを表す。そのため、通常考えられるイベント数量詞の<スコープ>は「主語」、<制限要素>は「テ型動詞補文+おく」である。ただし、「ておく」構文は<行為>に焦点を置く文であることに注意する必要がある。

(61) 私がビールを買っておく

統語的にフォーカスを指定することができる (62a) の分裂文では、(62b) の<スコープ>と<制限要素>、あるいは、<フォーカス>と<前提>を統語的に区別することができる。

- (62) a. It was *John* who kissed Mary.
 b. $[\exists x: x = \text{John}] [x \text{ kissed Mary}]$
 (scope) (restriction)

分裂文では左方転移の対象となるフォーカスは一般的に項であるのだが、フォーカスが述語に置かれる場合、<スコープ>は述語、<制限要素>は項になる。この考え方を、(61) の「ておく」構文に適用すると、イベント数量詞の<スコープ>は、通常考えられる「主語」ではなく「テ形動詞補文+おく」になり、<制限要素>は「主語」になる。しかしながら、先述したように、「ておく」構文は、動作主が「行為の時t1」において、「その行為の結果として、後の時t2において何らかの効力が発現するであろうこと」を見越した上で、t1の行為を意図的に行う、という意味特性を持つ (菊地 2009)。この点を考慮すると、<スコープ>が「主語」から「テ形動詞補文+おく」にシフトするという単純な変更では済まされない。そこでここでは、<スコープ>を文には含まれていない (t2に先行するコア事象の行為の時を指す) 「t1」、<制限要素>は「テ形動詞補文+おく」としてみよう。すると、(61) の論理構造は暫定的に (63) のように記述される。

- (63) $\exists e, e' \exists x [[[\text{Buy}(e) \ \& \text{Agent}(I, e) \ \& \text{Theme}(\text{beer}, e) \ \& \text{Cul}(e)] \ \& [\text{Agent}(I, e') \ \& \text{Cul}(e')] \ \& \text{cause}(e', e)] [[x: t1(x)] \ \text{Time}(e, x) \ \& \text{Buy}(e) \ \& \text{Agent}(I, e) \ \& \text{Theme}(\text{beer}, e) \ \& \text{Cul}(e)] \ \& [\text{Agent}(I, e') \ \& \text{Cul}(e')] \ \& \text{cause}(e', e)] \ \& e' < e]$

(63) は、caused eventのコア事象eがcausing eventの主節事象e'より後に行われることを表している。ただ、コア事象が「その行為の結果として、後のt2において何らかの効力が発現するであろうこと」を見越した行為であるという読みは、文脈や一般知識を介して語用論的に与えられるものであり、語用論的制約によって説明されるべきものであると考えられる。

5. おわりに

本稿では、多かれ少なかれ直感的なレベルで記述されていた「てある」/「ておく」構文の意味特徴を検討したうえで、イベント数量詞という概念を導入することにより、統一的視座の下で分析することを試みた。その結果、明らかになった興味深い点は、A型「てある」構文は対象の存在を表す存在文型の文、B型「てある」構文は主題による (コア事象の) 属性の所有を表す所有文型の文、そして、「ておく」構文は (通常項に置かれる焦点が動詞句にシフトした情報構造を持つ) 他動詞文型の文にそれぞれよく似た特徴を持つ、ということであり、特に、B型「てある」構文では、動作主がテ形動詞補文の表す行為の結果を属性として持つ持ち主や経験者でもある、という点である。ただし、この結論は暫定的なものであり、本稿で試みた分析の枠組みが他の複雑述語にも適用可能なものかどうかを確認するためには、さらなる検証が求められる。

謝辞

- * 本研究は科学研究費補助金基盤 (C) (課題番号21520403) によって支援されている。

注

1 影山 (1993:169) は、「テ形動詞+てある/ておく」の組み合わせが語としてのまとまりを獲得していないことを示す根拠として次の2点をあげている。

- ・テ形動詞の後に「も、さえ、ばかり」などの副助詞を付加できる。
 - (i) 食糧を買い込んでサエ{おいた/ある}
- ・(ii) と (iii) のコントラストが示しているように、単純語ないし合成語にかなり自由につけることができる名詞化の接尾辞「～方」と共起しない。
 - (ii) 切符の買い方、しゃべり始め方、話し終え方、(彼女の)くやしがり方、彼のやってき方
 - (iii) ?*(切符の)買って置き方、*(掛け軸の)掛けてあり方

- (ただし、「彼のやってき方（はへんだ）」はOK。（岸本秀樹氏の指摘(P.C.)による。）
- 2 本稿では、「事象」を出来事だけでなく状態も含む広い意味で使用する。
 - 3 図1は暫定的な図式である。
 - 4 ただし、B型「てある」構文には、(15f) のように、自動詞がコア事象を表し、目的語を表示しない場合がある。
 - 5 <イベント数量詞>については、§4.1で触れる。
 - 6 大文字表記の“SALMON”はフォーカスが置かれた要素であることを表す。
 - 7 Herburger(2000)は、全ての数量詞はcontext predicate Cによって制限されていると仮定するため、発話文脈により値が与えられるC(e)という項を設定している。(55)では簡略化のため、C(e)は削除した。

参考文献

- Davidson, D. 1967. The logical form of action sentences. In N. Rescher (ed.) *The Logic of Decision and Action*. Pittsburg: University of Pittsburg Press. 81-120.
- Diesing, M. 1992. *Indefinites*. Cambridge: MIT Press.
- Herburger, E. 2000. *What Counts Focus and Quantification*. Cambridge: MIT Press.
- 影山太郎 1993. 『文法と語形成』 東京: ひつじ書房.
- 菊地康人 2009. 「「ておく」の分析」『東京大学留学生センター教育研究論集』 15, 1-20.
- 金水 敏 2009. 「意志性・主観性と文脈」由本陽子・岸本秀樹(編)『語彙の意味と文法』 東京: くろしお出版. 273-284.
- Larson, R. & G. Segal 1995. *Knowledge of Meaning: An Introduction to Semantic Theory*. Cambridge: MIT Press.
- 益岡隆志 1987. 『命題の文法－日本語文法序説－』 東京: くろしお出版.
- 益岡隆志 1992. 「日本語の補助動詞構文－構文の意味の研究に向けて」文化言語学編集委員会 (編)『文化言語学 その提言と課題』 東京: 三省堂. 546-532.
- 森田良行 1977. 「～（て）ある」『基礎日本語』 東京: 角川書店. 51-55.
- 森田良行 1977. 「～（て）おく」『基礎日本語』 東京: 角川書店. 124.
- Parsons, T. 1990. *Events in the Semantics of English: A Study in Subatomic Semantics*. Cambridge: MIT Press.
- 杉村泰 2003. 「テオク構文とテアル構文の非対称性について」『名古屋大学言語文化論集』 24(2), 95-110.